

新刊紹介

日本精神史研究

和辻 哲郎 氏著
岩波書店の發行

本書は日本思想史の研究者として名命ある著者の論文集である。著者は先に「日本古代文化」を公刊して、日本の古代の文化につき、各方面から透徹した觀察を下し、鋭利な解剖を加へられた。その後、古代に續く各時代の文化に關する研究を發表される事を鶴首して待つた者は恐らく我々のみでは無かつたであらう。我々の希望は今までに満たされなかつたけれども、幸にして著者は本書を公表して、我々の渴を癒していただいたのである。論文集であるから、一定の組織を持つてゐないが、論文集であるだけ、それだけ、著者獨自の見解が明瞭に具現されてゐる。

本書に採録された論文が凡て十二篇である。それを著者自ら四つのグループに分けてゐられる。第一には「飛鳥寧樂時代の政治的理想」と外に、同時代の佛教藝術に關するものが四篇ある。第二には「萬葉集の歌と古今集の歌との相違について」及び「竹取物語、枕草紙、源氏物語等に關する論文が併せて五篇あ

る。第三には「沙門道元」の長篇を一篇、第四には「歌舞伎劇に就ての一考察」がある。

著者の説かれた所によれば、推古時代より奈良時代に至る政治理想は何であつたか。それは聖德太子の憲法に示されてゐる道徳的理想であつた。思想として憲法に現れてゐるのみならず、四天王寺の造營も佛教の慈悲を社會的に具體化せんとしたものである。下つて大寶令にもこの理想は明かに示されてゐる。國家的社會主義さといふべき口分田の收授はその最も著しい一例である。右の旨趣を論述したのが、「飛鳥寧樂時代の政治的理想」である。

「推古時代に於ける佛教受容の仕方について」は、從來は、この時代の佛教信仰はたゞ現世利益の爲であつた。つまり佛教思想に對する日本人の理解は淺薄であつたを解釋されてゐるが、決して功利的なものでなく、たゞ現世生活の不完全を佛にすがふ事によつて慰められたのである。當時の佛教は哲理や修行ではないが、現世を否定せずして彼岸を戀ふる憧憬の宗教であつたと説き、「佛教の相對に就ての一考察」は、白鳳天平の佛像は無邪氣な嬰兒のモテルとしてゐることを證明し、「推古天平美術の様式」は先づ、推古美術が六朝美術の模倣であり天平美術が初唐及び盛唐の美術の模倣であることを見方を斥け、東亞細亞全體を通じて一の文化潮流があり、日本人もその中で働いたに過ぎないといふ大きい見方を取り、推古式から天平式への展開の差は、模倣の手本が違ふと言ふ言ふよりも、むしろ、六朝式から初唐式への展開を更に純粹に遂行したものと解釋して、

その實例を彫刻、繪畫、建築の三方面に於て述べてある。「白鳳天平の彫刻と萬葉の短歌」は、普通、推古時代より弘仁時代の藝術が外來のもので、國民の實生活から遊離してゐると言はれるのに對して、然らざる所以を述べんが爲に、萬葉の短歌に見えてゐる心生活が、佛教美術に表現されてゐる精神生活とよく相應してゐることを述べたものである。

第二のグループに於て、第一の「萬葉集の歌と古今集の歌との相違について」では、直感的な萬葉集の歌と理智的な古今集の歌とを、その歌の内容、内容の表出法から比較してある。

「萬葉の歌が耽美すべき叙情詩であるに對して、古今の歌が曾てに叙情詩として價值少きを理解し得る。また古今の歌が曾て高く値ふみされたのは、そのあさに俤れたる物語文學を控へてゐる故」であるを結論してある。「お伽噺としての竹取物語」は竹取物語は「世戀小説」と解釋されてゐるが、却てたゞお伽噺としてのみ正當に評價されるといふ論文である。次に「枕草紙」に關する論文が二篇ある。一は「枕草紙の原典批評に就ての提案」であつて、流布本の錯簡を指摘しその原典へ復原すべき手がかりを宸翰本等の異本によつて示したもので、二は「枕草紙に就いて」であつて、作者清少納言が「官能的享樂人として時代の子で」ありながら勝氣な彼の女は、周到にして靜かな觀察をなした點についての論考である。「源氏物語について」は、今日の源氏物語が一人の創作ではなくして、原の源氏物語へ次第に増補されたものであらうといふ假説を提出したものである。次の「もののおはれ」といふ論文は、本居宣長が、源氏物語著作の

動機について、好色を描いて、却て好色を誡めたものだから、その他、色々の説のあるのを斥けて、「もののおはれ」を寫したものであり、一般に文學は道徳を説いたり、哲理を述べたりするものではなく、「もののおはれ」を寫せばその能事は終るものであると言つた、その「もののおはれ」の研究である。

第三のグループに置かれてある「沙門道元」といふ論文は、本書の三分の一を費した長篇であつて、精細に眞理の探求者としての道元（それは必ずしも宗派の開祖として後世から眺められてゐる道元ではない）の面目を描寫してある。

各篇より、興味の豊かな、又獨創的な點の多い教へられる所の多い論文である。先輩學者の氣の附かなかつた、點に對し、或は既に從來の學者が述べてゐても、徹底的に述べられてない點に對し、深い思索をこらし、鋭い批判を下し、明快な解剖を行つたものが多い。一々の論考の價值については、我々後進の決しえざる問題であり、恐らく、學界に於て將來の解決に待つべきものとされて残るべきであらうが、とにかく天平佛像の相好のモデル問題といひ、枕草紙の原典批評の提案といひ、今日の源氏物語が何人が多數の人々の手により、増補されたものであるといふ假説の如き、斬新有益な研究であること、疑のない點であらう。就中、「沙門道元」は最も熱のこもつたもので、或は著者として最も快心なものではないかと思像される。私一箇として本書から、最も多く教へられ、興へられたのはこの論文であつた。只「歌舞伎劇に就ての一考察」について、私は全く豫備知識がないので、誤解の多からんことを恐れて、紹介を

差控へておく。(高橋俊乘)

心 理 學

シエームス著
今 田 憲譯

ホリアム、シエームスは心理學を定義して「心理學の定義は意識狀態そのものの記述及び説明と云ふのが一番よい」と云ふて居る如く、彼の心理學は具體的全意識狀態に注意を向ける點に其の特徴がある。其の心理學は機能的心理學であつて、ゲント風の構成的心理學に對立して居る。構成的心理學に於ては意識過程の構成、組織を明らかにせんとし、意識の分析して最も簡單な心的要素に分ち、複雑な意識過程は其の心的要素の結合であるとして説明せんとする。其の研究は具體的統一的意識を抽象的心的要素に分析する事から出發する。之に反して機能的心理學に於ては前者が分析的、解剖的に意識の組織を明らかにせんとするに對し、此は意識を統一的、具體的全體として研究し、其の機能を説明せんとする。シエームスは此の著の序に曰「余は、吾々の最も熟知して居る一層具體的な心的方面から、後に抽象作用によつて自然に知るに到る所謂要素に進むのが、適當なる教授上の順序であると思ふ……………」反對に心の「構成單位」から心を「組立てる」順序は、説明の體裁がよいと云ふ特徴を有し、區分整然たる目次を與へ得るけれども屢々之等の利益を得んが爲に眞相と眞理とを犠牲に供することがある。」

又曰「吾々は意識の細分せられたる「要素」を死體解剖的に研究するよりも、出來る限り具體統一的に吾々に映するまゝの全意識狀態に注意を拂ふことによつて、實際のものつゝ生きた理解をなし得るを考ふるものである。細分せられたる要領の檢屍的研究は人爲的抽象的研究であつて、自然的事物の研究ではない。」と。彼の心理學の特徴はゲントのそれと比較することによつて一層明瞭にすることが出来る。ゲントは最も簡單なる心的要素として感覺と單純感情とを挙げ、其等が綜合し複雑なる具體的意識狀態となる過程を追ひ、其の法則を發見せんとして居るに對し、彼は意識狀態をそのまゝに具體的、綜合的に取扱はんとして居る。前者の抽象的分析的、構成的なるに對し、後者は具體的、綜合的、機能的である。前者の純科學者のなるに對し、後者は科學者のなることにも天才的、藝術家的でもある。

前者の著述の組織的、體系的、秩序的なるに對し、後者は情熱的で、行文、引例の妙、趣味の豊富なる點に勝つて居る、シエームスが其の大著 *The Principles of Psychology* 二卷を公にしたのはゲントの大著 *Grundzüge* 三卷に廻れる事十六年即一千八百九十年であるが、その公にせられるや「一世驚倒し學界及一般社會は口を揃へて讚嘆を吝しまなかつた。」しかしそのあまりに滑翰なる事は一般讀者にとつて不便であつたために、一千八百九十二年、其を短縮して出版されたものが本譯書原書 *Psychology, Brief Course* である。此はゲントの *Grundriss* の出版に先立つ事四年である。既に我國にゲントの心理學は一般に廣く紹介せられて居るのに對し、シエームスの其は未だそれ